

# アクティブ・ラーニングと学習成果に関する研究

## — 「山口と世界」を通して得られた知見と課題 —

小 川 勤

### 要旨

日本の多くの高等教育機関では、学生の主体的な学びを促すアクティブ・ラーニングの手法が各授業の中でなんらかの形で導入されている。この背景には高等教育の質保証を図るために、学士力または社会人基礎力を大学教育の中で育成している必要があるからである。しかし、アクティブ・ラーニングといわれてもその内容は千差万別である。そこで本稿では、最初にアクティブ・ラーニングの定義・種類・導入背景を考察する。次に、本学において平成25年4月から導入された新しい共通教育の中で、新たに開講された「山口と世界」の中で具体的にどのようにアクティブ・ラーニングが実施され、その際の成績評価の方法はどのように行われたかを明らかにする。最後に、実施上の成果と課題および「メタ学習者」となるための条件を明らかにする。

### キーワード

アクティブ・ラーニング 学士力 社会人基礎力 共通教育 山口と世界

#### 1 はじめに

日本の高等教育機関では、現在、アクティブ・ラーニング（以下、AL: Active Learning）の手法がなんらかの形で導入されている。しかし、ALといっても、その意味するところは人により異なる。そこで、最初にALとは何を意味するのか定義するとともに、その種類を分析する。また、なぜALが最近注目されているのかその背景を探る。さらに、筆者が山口大学の「山口と世界」の授業を担当した際にどのような内容（テーマ）を設定し、どのような教育方法を用いてALを実践したのか。また、成績評価は具体的にどのように実施したのかを明らかにする。

最後に「山口と世界」を受講した学生たちに、感想と課題をヒアリングした結果と「メタ学習者」になるための条件を明らかにする。

#### 2 ALの定義および種類、導入背景

##### 2.1 ALの定義

文部科学省は、用語集<sup>1</sup>の中で次のようにALを定義するとともに、その具体的な内容について明らかにしている。

「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」

一方、溝上（2010）<sup>2</sup>は、ALとは「能動的な学習」のことで、授業者が一方向的に学生に知

識伝達をする講義スタイルではなく、課題研究やPBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）、ディスカッション、プレゼンテーションなど、学生の能動的な学習を取り込んだ授業を総称する用語であると述べている。

また、山田（2013）<sup>3</sup>は、ALを「実社会で直面する複雑・多様な正解が一つでない課題に適切に対応できる思考力、創造力および課題探究能力を育成するために効果的な手法であり、体験学習、ディスカッション、学生のプレゼンテーションによる双方向対話型授業あるいは学生が自ら資料や文献を探し、授業の事前・事後の学習に関わる等も含まれる」と定義している。

そこで、本稿では、ALを以下のように定義する。

「アクティブ・ラーニングとは能動的な学習のことで、授業者（教員）が一方向的に学生に知識伝達をする講義スタイルではなく、学生が将来社会で求められる能力の基盤となるジェネリックスキルを内発的動機づけに駆り立てられながら習得できるように学習内容と方法、そして環境を準備し、「学生は授業を通して何ができるようになったのか」を基準にして授業設計を考える学修スタイルをアクティブ・ラーニングと呼ぶ。具体的には課題研究やPBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）、ディスカッション、プレゼンテーションなど、学生の能動的な学習を取り込んだ授業を総称して、アクティブ・ラーニングという」

ALという言葉は初耳だという大学教員は多いが、上記の定義内容から考えると大学教育におけるALの導入は、それぞれの大学の授業の中で、すでに導入され実践されているという事実気づく。すなわち、言葉としてのALは、説明概念としては新しいものであるかもしれないが、教育手法そのものは古くから大学教育の中で部分的に組み入れられてきたといえる。

## 2. 2 ALの種類

溝上（2010）によれば、ALが示す授業の形

態や内容は非常に広く、その目的も大学や学部・学科によってさまざまである。ここでは溝上<sup>4</sup>が示したALの種類を紹介する（図1参照）。

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>● 学生参加型授業           <ul style="list-style-type: none"> <li>・コメント・質問を書かせる／フィードバック、理解度を確認</li> <li>・クリッカー／レスポンス・アナライザー、授業最後／最初に小テスト／ミニレポートなど</li> </ul> </li> <li>● 各種の共同学習を取り入れた授業           <ul style="list-style-type: none"> <li>・協調学習／協同学習</li> </ul> </li> <li>● 各種の学習形態を取り入れた授業           <ul style="list-style-type: none"> <li>・課題解決学習／課題探求学習／問題解決学習／問題発見学習</li> </ul> </li> <li>● PBLを取り入れた授業</li> </ul> |
|---|

図1 ALの種類

## 2. 3 AL導入の背景

ALが高等教育に広がった背景には、知識を活用できる人材を養成することが社会から求められるようになったことがある。山田（2013）は、今、なぜALに取り組まなければならないかという問いに対して、「実践知・応用知の獲得にはALが、親和性がある<sup>4</sup>」と述べている。

また、この間の時代背景と能力育成の関係は次の通りである。

1980年代までは、人材育成において中等教育の果たす役割が重視されていた。つまり、高校で基礎学力や協調性などをもった標準的な人材をしっかりと育成して、その人たちが日本経済の発展を支えるというモデルが求められた。この間、商業や工業などの職業教育は企業における標準的な中間管理職を育成するのに大きな役割を果たした。ところが1980年代に入り、情報化社会が到来し、1990年代に入るとインターネットも登場し情報化が急速に加速した。さらにバブルが崩壊すると、日本がこれまで積み上げ構築してきた年功序列型の終身雇用制度などの社会のあらゆるシステムが変容を余儀なくされ、

社会を再構築しなければならなくなった。同時に、当時の日本は、欧米に追いつけ追い越せの時代が終わり、今後は日本独自のスタイルをもって新しい知を創出し、世界に貢献していかねばならない時代を迎えていた。そこで、1990年代以降は、標準的な力に加え、多様性や創造性や他者と交渉する力などを備えた、新しい社会を創出できる人材が求められるようになったのである。このような人材は中等教育もさることながら、高等教育でも育成することが求められた。そこで大学では、講義で知識を一方的に教えるだけでは不十分で、学生が自ら頭を使って考えたり議論したりするような教育、すなわちALを実施することが必要になったのである。実は新しい社会を創出できる人材の育成は大学段階だけでなく、初等・中等教育段階でも行われている。この人材育成に大きな役割を果たしてきたのが、OECDが実施している国際学力到達度調査（以下PISA<sup>5)</sup>）であると筆者は考えている。PISAの調査は、各国の子どもたちが実生活の様々な場面で直面する課題に活用できる知識・技能をどの程度身に付けているかを測定するために実施されている。PISAが測定しようとしている能力は、まさに新しい社会を創出することができる人材の能力育成と合致しているのである。さらに、ALの手法を利用して授業の中で育成しようと考えている能力とも一致している。このため、ALは最近注目されているのである<sup>6)</sup>。

このように、ALが今、改めて注目されるのは、世界的な大学教育改革の流れの中で「学習者中心の教育」の模索が本格化してきたこととも呼応する。そして「学習者中心の教育」、すなわち「教員が何を教えたか」ではなく「学生が何をできるようになったのか」を基準として教育を考える場合、講義形式の授業だけではなく学生が能動的に授業に参加する授業形態が今まで以上に求められるようになったのである。

### 3 「山口と世界」の授業設計

#### 3. 1 「山口と世界」の目的と到達目標

表 1 山口と世界の観点別到達目標

知識・理解の観点	山口大学の歴史や現状を世界的な視野で捉えることができる。
思考・判断の観点	大学教育の効用について歴史的、文化的、経済的側面から多面的に捉え、どのようにとらえるべきかを主体的に判断することができる。
関心・意欲の観点	大学教育や高校教育の諸問題に関心をもち、その発展に貢献したいと思うことができる。
態度の観点	主体的に考え、行動することができる。グループ活動に積極的に関わることができる。
技能・表現の観点	資料を適切に収集し、的確に分析することができる。 自分の考えを適切に表現することができる。

山口大学の共通教育で行われている「山口と世界」とは、課題探求型の授業であり、主体的な学修をする授業である。山口大学の歴史や受講生が所属する学部・学科の現在の課題について調査や協議を行いながら課題等の発見と解決策について考えることを教育目標としている。

一般目標としては、課題探求型の能動的学修をとおして、山口大学の歴史、山口県の教育など身近な地域の特色を知り、地域社会の発展に寄与する能力や態度を身につけるとともに、それらの資質を将来所属する地域や国際的環境で活かす力を養うことを目指している。本授業の到達目標は、表1に示した通りである。

#### 3. 2 「山口と世界」の授業計画

筆者が担当した「山口と世界」の授業の受講生の状況は以下の通りである。

(受講生の状況)

①理系学部所属1年生 37名

(内訳) 理学部 9名、農学部 10名、共同獣医学部 2名、医学部医学科 6名、医学部保健学科 10名

②男女割合：男子学生15名、女子学生22名

また、担当教員と受講生とが意思疎通を図りつつ、受講生同士が切磋琢磨し、相互に刺激

を与えながら知的に成長する課題探求型の能動的学修に取り組むことを目指して、以下のような授業計画を策定し、講義や演習を展開している。

第1週 オリエンテーション

授業の特徴と授業の進め方を理解する。

第2週 山口大学の歴史と現状を調査

テーマ①山口大学の歴史と現状を知る。

第3週 グループ内で調査結果の分析とプレゼン準備

調査結果の分析とプレゼン準備

第4週 発表①

各班が所定の時間内に調査した結果を発表し、相互評価および意見交換を行う。

第5週 高校教育と大学教育との接続の問題を考える

テーマ②高大接続の問題と解決策を考える。

第6週 テーマ③大学教育の効用（大学プレミアム）を考える。

日本および世界の大学の動きを最初講義で聞いた後で大学教育の効用を考える。

第7週 プレゼン準備

テーマ②および③について、個人およびグループで協議した内容を発表する準備を行う。

第8週 発表②

各班が所定の時間内にテーマ②およびテーマ③について協議した内容を発表し、相互評価を行う。

3.3 「山口と世界」の成績評価方法

筆者は当該授業の成績評価は、個人の活動とグループ活動を振り返りシートなどの成果物（ポートフォリオ）を元にして表2のような方法で成績評価を実施した。

(1) 個人の活動（配点割合：全体の40%）

- ・毎回、授業および演習のふり返りを「授業ふり返りシート」に記入し提出させる。最終的には全体の記入内

容を20点満点で評価する。（20点満点）

- ・授業が終了した時点でレポート課題を作成し提出させ、その内容を評価する。（80点満点）

(2) グループ活動（配点割合：全体の60%）

- ・班のリーダーが授業ごとのグループ活動をふり返り、「グループ・リフレクション・シート」に記入し、提出する。最終的には、全体的な内容を20点満点で評価する。（20点満点）
- ・プロジェクトに関する成果（提出）物（プレゼンデータ・分析時に使用したポストイット、調査・収集したデータなど）の内容を発表ごと（発表2回実施）に各15点合計30点満点で評価する。
- ・2回のプレゼンテーションに対する相互評価（学生・教員による評価シート）の結果を発表ごとに各50点満点、合計100点満点で評価する。
- ・教員評価  
2回のプレゼンテーションに対する教員評価の結果を発表ごと各50点で評価し、最終的には、2回の評価の平均で評価する。（50点満点）

表2 成績評価の方法

①グループの振り返り評価持ち点 (内訳)	合計 200点	②個人の持ち点 (内訳)	合計 100点
1回目のグループ発表	50点満点	個人の振り返り評価	20点満点
2回目のグループ発表	50点満点	期末のレポート課題	80点満点
グループの振り返り評価	20点満点		
プレゼン教材等の準備状況	30点満点		
グループ発表に対する教員評価	50点満点		
③個人の成績評価方法(100点満点に換算) = ①×1/2×60% + ②×40%			

#### (4) 提出物 (ポートフォリオ)

- ①各自、毎回、授業の最後に振り返りシート (個人用) を記入する。
- ②グループ・リーダーは、翌週の月曜日までにグループ・リフレクション・シート (グループの振り返りシート) を作成し、授業担当者に提出する。忘れた場合には、その班全体にペナルティが加えられる。
- ③全体の授業終了後に、「授業全体のふり返りを兼ねて「期末レポート課題」を個人で作成し、期日までに提出する。なお、期末レポート課題のテーマや記載方法については、第7回目の授業の冒頭で説明する。

期末レポート課題の出題内容は以下の通りである。

「山口と世界」の授業では、山口大学や所属する学部・学科の歴史を調べるとともに、現在の高校教育の課題と解決策、大学で学ぶことの効用 (大学プレミアム) について、個人ワークや班活動 (グループワーク) を通して考えてきた。そこで、この授業を通して、「学習」に対する考え方が、この授業を受講する前と後とでは、どのように変化したかを記述せよ。

なお、レポートを記述する際には、自分のレポート内容に合ったタイトルを考えて冒頭に記述すること。

#### 4 「山口と世界」のテーマ設定

「山口と世界」では8回の授業の中で3つのテーマ (課題) を設定し、個人およびグループで協議させた。また、協議した結果をプレゼンし、受講生間で相互評価を実施した。

##### 4. 1 テーマ1 : 「山口大学の歴史と現状を調査・分析する。」

(作業内容)

- ①山口大学や受講生が在籍する学部・学科の歴史、現状の課題などについて、インター

ネット、図書館、先輩・同僚などから情報を収集し、集まったデータを班内で確認する。

- ②収集したデータについて、班内で分析し、歴史や現状の課題等について協議する。
- ③分析した結果をどのように発表 (プレゼン) するかを考える。
- ④プレゼンを考える際に、各班に配布した模造紙やポストイットなどを有効に利用するように指導した。また、PCのプレゼンソフトだけでなく、模造紙などを使ってプレゼンしてもよいと指導した。
- ⑤プレゼンデータが完成した班は、リハーサルを実施する。授業時間内に実施できない場合には、空き時間・空き教室を使ってリハーサルを実施するように指示した。

上記②および③を検討する際には、各班に配布された紙 (A2版) およびポストイットなどを随時有効に利用するように指導した。

##### 4. 2 テーマ2 : 「高校教育と大学教育の接続を考える」高大接続の問題を考える。

(作業内容)

- ①各班に、紙1枚 (A2版) およびポストイットを配布した。
- ②個人ワーク (制限時間5分) : これまで高校で学んできた教育内容や教育方法を振り返って、どのような問題や課題があるかを考えさせた。その際に、問題点や課題をポストイット1枚に付きに1つ問題点および課題を記入するように指導した。
- ③グループワーク (制限時間30分) :
  - (a) 班内で一人ずつ、どのような問題点を考えたか説明しながら、紙 (A2型) にポストイットを貼り付けていく。
  - (b) 一巡したら、提出された問題点を協議して、同じような問題点を一つにまとめ、グルーピングする。
- ④個人ワーク (5分) : ③でいくつかグルーピングした問題点を解決するために、どの

ような解決策があるかを考え、その解決策をポストイットに1枚ずつ記入する。

⑤グループワーク（制限時間40分）：

- (a)一人ずつ順番に、どのような解決策を考えたかを説明しながら、グルーピングした問題点の近くに解決策が記載されたポストイットを貼り付ける。
- (b)一人の発表に対して、質問や意見があったら、その場ですぐに発表者に聞くように指導した。
- (c)一巡したら、提出された解決策について、班内で再度協議し、どの解決策が有効かについて再度協議させた。
- (d)協議が終了したら、第8週の発表②に向けて発表者を決定する。

⑥「授業振り返りシート（個人ワーク）」の第5週の部分を記入する。

⑦各班のリーダーは、「グループの授業振り返りシート」に記入する。記入が終了したら、翌週の月曜日までに授業担当者の研究室のボックスに投函するように指導した。次週の授業時に授業担当者より各班のリーダーに当該シートを返却する。

#### 4. 3 テーマ3：「大学プレミアムを考える」大学教育の効用（大学プレミアム）を考える。

最初に授業担当者から大学プレミアムを考える際に参考になる資料を配布し、その資料を使って、大学の効用（大学プレミアム）について協議するよう指示した。作業手順は以下の通りである。

（作業内容）

①個人ワーク（制限時間10分）：授業担当者から2つの課題を与えられるので各自で考える。

(a)課題1：

「長期的な不況が続いているにもかかわらず、なぜ、大学卒の給与は、短大卒、高校卒の者の給与より相対的に上昇しているのか。その背景と理由を分析し、分析した結果をポスト

イット1枚に付きに1つの結果を記入する。複数の理由を考えた場合、ポストイットに1枚1つの理由を記入するように指導した。

(b)課題2：

「大学で学んだことが果たして将来、役立つのだろうか？」もし仮に役立つと考えたら、社会のどのような場面で役立つと思うか？このことについて各自考え、考えた結果をポストイット1枚に付き1つ記入する。

③グループワーク（制限時間 合計40分）：課題1・課題2（制限時間各20分）

(a)一人ずつ順番に、どのように考えたかを説明しながら、紙（A2型）にポストイットを貼り付けていく。

(b)一巡したら、提出された結果を協議して、同じような背景や理由を一つにまとめ、グルーピングする。

④協議が終了したら、第8週時の発表②に向け発表者を決定する。

⑤「授業振り返りシート（個人ワーク）」の第6週の部分を記入する。

⑥各班のリーダーは、「グループの授業振り返りシート」を記入する。記入が終了したら、翌週の月曜日までに授業担当者の研究室のボックスに投函する。次週の授業時に授業担当者より各班のリーダーに当該シートを返却する。

#### 4. 4 発表（プレゼン）の方法

発表①（第4週）および②（第8週）の発表方法は以下の通りである。

（作業内容）

①発表 制限時間7分（タイム・キーパー制：5分で予鈴 1回 終了で予鈴3回）

②評価者（視聴者）は、発表を聞きながら、評価項目ごとに、「良かった点」、「改善すべき点」について発表を聞きながら記入していく。

③相互評価 制限時間3分：発表中で時間がなくて記載できなかった評価項目について評価内容を記入する。

④評価結果の発表・意見交換 制限時間2分：  
受講者から約2名程度を指名し、発表に対する評価結果や発表内容に対する感想や意見を述べる。

⑤授業全体では、1班あたり 12分×7班 = 84分で実施する。残りの時間は、発表準備（入れ替え時間等）に利用する。

## 5 考察

### 5. 1 「山口と世界」の成績結果の分析

#### 5. 1. 1 全体的な成績評価の結果

表2のような方法で成績評価を行った結果、グループ評価（200点満点）では、150点台の班が2班、140点台が4班、130点台が1班であった。

また、個人評価の結果は、秀（総合評価が90点以上）が1名、優（総合評価が80点以上90点未満）が28名、良（総合評価が70点以上80点未満）が8名であった。全体の75.7%が「優」という結果となった。

今回、グループ評価の重み付け（ウェイト）が全体評価の60%と比較的高かったため、グループ評価の結果が最終的な個人の成績評価の結果に及ぼす影響が大きかった。例えば、グループ評価で一番評価が低かった班（グループ評価が130点台）から個人評価が「良」と評価された学生が4名をおり、全体で「良」と評価された受講生8名の50%を占める結果となった。

#### 5. 1. 2 発表の相互評価の結果

受講生間の相互評価を実施した結果を評価項目別・発表回数別に示したものが表3である。この中で、「教材」および「視覚情報」の評価項目が1回目より2回目の方が上昇している。この原因は、「教材」の評価内容が「プレゼンや模造紙等が十分準備され、発表中に効果的に利用されたか」という内容であり、全ての班が1回目より2回目の方がプレゼンデータの内容を改善するとともに、模造紙等を効果的に利用した結果であると考えられる。また、「視覚情報」は、「身振りや手振り、顔の表情、アイコ

表 3 発表（2回）に対する相互評価の結果

		全体
理解度	発表1回目	7.58
	発表2回目	7.55
関心度	発表1回目	7.39
	発表2回目	7.39
聴覚情報	発表1回目	7.21
	発表2回目	6.96
教材	発表1回目	7.22
	発表2回目	7.31
視覚情報	発表1回目	6.76
	発表2回目	6.87
		36.17
		36.07

ンタクトなどの適切性」についての評価であり、受講生が発表方法に1回目より2回目の方が慣れてきて改善が進んだ結果と考えられる。

一方、「理解度」や「関心度」などの評価項目は、顕著な上昇はみられなかった。この原因としては、テーマ設定が1回目より難しくなったことが考えられる。1回目の発表テーマは、自らが所属する学部・学科の歴史や現状の課題などを調査し発表するものであったが、小中学校の頃から、このような調査や発表の方法に比較的慣れていることと、テーマ自体が視聴者である受講生が興味・関心を抱きやすかったと考えられる。一方、2回目の発表は、「高大接続」と「大学プレミアム」について協議した結果を発表するというものであり、今までにこのようなことを考えた経験がほとんどなく、どのように対処したらよいか戸惑っていたことが伺える。実際、授業終了後に提出させた課題レポート中で受講生から「このようなテーマで話し合い、個人で考えたことは小中学校以来の経験であり、当初はどのようにグループ協議を進めればよいか大変戸惑った」という感想や意見が述べられていた。

さらに、意外であったのは「聴覚情報」の評価結果である。評価内容としては、「発表時の声の大きさ、速さ、言葉使い」など発表の仕方そのものを評価するものである。1回目（7.2ポイント）より2回目（6.96ポイント）は0.25ポイント低下した。この原因は、1回目と2回の発

表者が異なることが原因として挙げられる。多くの学生に発表の機会を与えるという趣旨で、1回目と2回目とで発表者を代えるように指導した結果、1回目の発表の様子を視聴者として参加して感覚的に理解していたにも拘らず、その経験知を十分に2回目の発表者に活かされない結果となった。1回目と2回目が同じ者が発表していたら、聴覚情報に関する評価は逆に上昇したのではないかと考えられる。結果、この発表方法では集団としての経験知が個人には十分活かされないということが明らかになった。この辺りを今後どのように改善するかが課題である。

### 5. 1. 3 担当教員の発表評価の結果

2回にわたる発表に対する担当教員の評価は表4の通りである。

視覚情報に関する評価項目を除いて他の全ての評価項目が第1回目の発表の方が2回目の発表評価の結果より良い結果となった。

視覚情報に関する評価は、第1回目の発表の経験知が活かされた結果であると考えられる。一方、他の評価項目が2回目の評価が1回目の評価より低下した原因は、上記5.1.2で指摘した原因と同じであると考えられる。特にテーマ3の「大学プレミアム（大学教育の効用）」のテーマ設定は、受講生が想像により検討・協議する結果となったため、理解度や関心度が低い結果となったと考えられる。このため、今後テーマ設定や実施方法を再検討する必要があると感じた。

表 4 担当教員の発表の評価

	教員評価(10点満点)	
	発表1回目	発表2回目
理解度	8.29	8.14
関心度	8.43	8.14
聴覚情報	7.86	7.00
教材	7.86	7.71
視覚情報	5.57	5.86

## 5. 2 受講生の「学習意識」の変容

### ーレポート課題の分析からー

受講生に授業終了以後に課題レポートを提出させた。この中で、ALなどの演習中心の「山口と世界」を受講した感想や意見をレポート形式で記述した内容を分析した結果が表5である。

表 5 受講生の課題レポートの分析結果

順位	受講生の課題レポート分析結果	合計点
1	学習に対する意識・姿勢が変化した	34
2	大学で学ぶ意義がわかった	23
3	グループで協議する意義が分かった	22
4	高校教育の課題と改善策が理解できた	10
5	プレゼンの仕方がわかった	8
6	広い視野から物事を考えることができるようになった	8
7	コミュニケーション力が身についた	6
8	日本語表現能力の不足(重要性)を感じた	6
9	共通教育の意義と課題を理解できるようになった	6
10	自分の学部・学科の歴史や現状の課題を理解できた	5
11	自分の進路を振りかえるきっかけになった	4
12	コンピテンシーの重要さがわかった	2

分析の結果、当該授業を受講した結果、「学習に対する意識・姿勢が変化した」という意見や感想が最も多かった(34ポイント)。次に「大学で学ぶ意義がわかった」という意見や感想が多かった(23ポイント)。これらに関する受講生の具体的な記述内容は次の通りである。

「今までほとんどの授業に対して、授業に出席して単位さえ取ればよいと受動的に考えてきたが、この授業を受講して、大学への学習に積極的に取り組むことは社会に出た時にも役立つ。そして、今現在の自分の毎日を豊かにするという事に気が付いた。(農学部1年生)」、「いつも頭の片隅に『単位が取ればそれでいい』という考えがあった。しかし、この授業を受講して、大学入学後この半年で自分は何を学べたのか。自分は何のために学ぼうとしているのかといった学習への意識の変化が自分の中で起こり始めていることに気づき始めた。(農学部1年生)」、「この授業を受講して一番感じたことは、積極的に学習に取り組む楽しさである



(農学部1年生)」。このように、ALを導入した授業は、能動的に学ぶことを通して、学びの意義や大学での学びについて受講生に再確認させるよい機会を与えていると考えられる。

次に多かった意見・感想としては「グループで協議する意義が分かった」ということである(22ポイント)。具体的な記述内容としては、「今まで学習は一人でやるものと考えてきた。しかし、この授業を受講して、グループで議論や討論を行うことの重要性に気づいた(医学部医学科1年生)」、「私だけでは思いつかなかった解決策がグループ協議を通じて得ることができ、解決策が豊富になった(医学部保健学科1年生)」、「グループワークの良さは、みんなで考えて多彩な意見が出ることだと思った(理学部1年生)」という意見が多く出された。このことは「プレゼンテーションの仕方が分かった(8ポイント)」や「コミュニケーション力が身に付いた(6ポイント)」という意見とも関連性があると考えられる。

これ以外には「広い視野から物事を考えることができるようになった(8ポイント)」や「共通教育の意義と課題を理解できるようになった(6ポイント)」などの意見を上げる受講生が目立った。

## 6 まとめ

本稿では、最初にALの定義・種類・導入背景を考察し分析を行った。次に、平成25年4月から導入された新しい共通教育の中で、新たに開講された「山口と世界」の中で具体的にどのようにアクティブ・ラーニングが実践され、成績評価の方法はどのように実施されたかを明らかにした。

そこで最後に、ALを実施した成果や課題についてまとめるとともに、「メタ学習者」となるための条件を併せて明らかにする。

一つ目の成果としては、受講生が学習に対する意識を変化させるようになったことである。能動的な学習とはいったいどのような学

習形態であるかを実体験から理解するとともに、これまでの自分の学習に対する意識を振り返る(リフレクション)ためのよい機会になったことである。これに関して、土持(2013)は、能動的学習について「省察」の重要性を挙げている。省察とは「学習プロセス」について振り返り、自らに問いかけるものであり、何をうまく学べたか、どのように学べたか、学習者としての自分にどのような意味が見出せたのかなどの学習プロセスを振り返ることで、自らの学習パターンに気づき、さらに学習についての理解を深め、学習者としての自分が理解できるようになると述べている<sup>7)</sup>。筆者もそういう学修プロセスを経ることにより、単なる学習者ではなく、「メタ学習者」になると考えている。すなわち、単にある科目を学んでいるのではなく、学習について学んでいることになり、自律的な学習者になることができるのである。そのためには時々立ち止まり、学習プロセスを振り返る必要がある。

二つ目の成果としては、グループ学習の意義を受講生自身が自覚したことにある。受講生の意見・感想にもあったように、高校時代から今までの学習は大学受験に向けた学習であり、とかく一人でやるものであるという意識が強い。しかし、この授業を受講する中で、グループで議論や討論を行い、多種多様な意見に触れることにより、自分の意見や考え方をより充実した内容に再構築することができるということを受講生が実感できたことである。いわゆる「社会構成主義<sup>8)</sup>」的な学習観を受講者自身がこの授業を通じて身に付けたことになる。

三つ目の成果は、人とのコミュニケーションやリーダーシップの取り方、解答のない問題の解決のために果敢に取り組んでいくチャレンジ性など、知識伝達型、暗記型の授業では達成することに限界があるコンピテンシー能力の育成にこのAL型の授業が貢献できた

ことである。基礎学力、知識量、順応性等の能力は従来からの知識伝達型のティーチングとラーニングでも十分対応可能である。しかし、上記に示した能力の育成には、今回実施したAL型の授業は大いに役立つことが証明された。特に実践知、応用知の獲得にはAL型の授業は親和性が高く、2年生以降に専門教育を学んでいく際にも初年次教育でAL型の授業（演習）を体験していることは重要であると考えられる。

一方、課題として以下のものが挙げられる。

一つ目の課題としては、テーマ設定の問題である。本稿の中でも述べたように今回3つのテーマを設定し受講生に取り組みさせたが、受講生は、第1テーマ（自学部の歴史と課題を調査）と第2テーマ（高校教育の課題と解決策）は、比較的取り組みやすかったようである。しかし、第3テーマ（大学プレミアム（大学教育の有用性））は漠然としたテーマであり、受講生自らがこれまであまり考えたこともなく、もちろん体験したこともないため、どのように考えたらよいか悩んだようである。このような事態が起こることをある程度事前に予想できたため、大学プレミアムを考える際に参考になる資料を事前に用意し、この資料を使って大学教育の有用性（大学プレミアム）を考えるように指導した。しかし、実際にはなかなかうまくいかなかった。テーマ設定は、AL型授業がうまく機能するかどうかの重要なポイントであるため事前に受講生のレディネス（予備知識・経験知）などの実態を調査してから設定する必要があるが改めてわかった。

二つ目の課題は発表方法である。今回2回の発表を行ったが、それぞれ別の発表者に発表を行わせた。これは、できるだけ多くの受講生にプレゼン（発表）の機会を与えた方がよいという判断からであった。しかし、意外に1回目の経験知や組織知が2回の発表に活かされないことが相互評価の結果（表3参照）

から明らかになった。今後は2回とも同一の者が発表するなどの改善策を検討する必要がある。

三つ目の課題は成績評価の方法である。今回の成績評価方法は、個人評価の割合（全体の40%）よりグループ評価の重み付け（全体の60%）が多かった。その結果、グループの評価が低かったグループから「良」の評価を付けられる者が多く出た。受講生には今回の成績評価方法については事前に説明済みであった。当初、重み付けを個人とグループとで50%ずつにした案も考えたが、AL型授業の趣旨からグループ活動を重視するという考え方から今回の成績評価方法を導入した。しかし、発表者の発表の出来、不出来の結果がグループ評価だけでなく、個人評価にも影響を与える結果をみて、今後、発表者をどのようにするかという問題と併せて、評価方法を再検討する必要があると感じた。

また、成績評価の根拠資料として各種のポートフォリオ（振り返りシートなどの成果物）を提出させたが（3.3の(4)を参照）、本当にこれでよいのか検討するとともに、ポートフォリオの評価基準も併せて再検討する必要があると感じている。

四つ目の課題は、教員間の成績評価の格差問題である。本年度は導入開始年ということでそれほど大きな問題になっていないが、授業を担当する教員間で成績評価をどのように平準化するかを今後検討する必要がある。新しい共通教育の他の科目でも同様な問題がすでに発生しており、FDなどを通じて、このことについて話し合う機会が必要がある。現在、成績分布公表システムを利用することにより、「山口と世界」を担当している先生方の成績評価の結果は知ることができる。この結果を踏まえて、今後、成績の調整を行うかどうか。もし調整を行う場合、どのような方法が考えられるかを授業担当者間で十分話し合う必要がある。

さらに、成績評価の調整の問題だけでなく、受講生の評価の高い授業実践の手法を、ピア・レビューやFDなどを通して教員間で共有することも併せて必要である。

(大学教育センター副センター長・教授)

### 【謝辞】

本稿を執筆するに当たり、ALに関する文献や資料の収集などについて、多くの高等教育研究者や山口と世界の授業担当者から多大な協力を得たことにより完成したものであり、この場をお借りして、あらためて感謝申し上げます。

### 【参考文献・資料】

- 1) 溝上慎一, 2010, 「アクティブ・ラーニングとは」, Kawaijuku Guideline 2010.11, pp.44-46
- 2) 小川勤, 2012, 「商業教育論から考察した新たな教授法の研究—アクティブ・ラーニングと商業科教育法—」, 日本商業教育学会商業教育論集第22集, pp.27-34
- 3) 中島誠, 2013, 『教育改革において初年次教育が果たした役割: 全学的導入から4年間の成果検証まで』, 三重大学高等教育創造開発センター, 平成25年度大学教育研究センター等協議会(金沢大学)発表資料
- 4) 矢野 眞和『大学教育の効用』, 桜美林大学・大学アドミニストレーション研究科、河合塾・リアセックセミナー「動き始めたジェネリックスキルの育成と評価」プレゼン資料
- 5) 橋本健夫、「新しい教養教育の一步と課題」、長崎大学 学長特別補佐大学教育機能開発センター副センター長、河合塾・リアセックセミナー「動き始めたジェネリックスキルの育成と評価」プレゼン資料
- 6) 山田礼子, 2013, 「学習成果につながるアクティブ・ラーニング」, 私学高等教育研

究所シリーズ No. 52, pp.89-116

- 7) 中央教育審議会, 2008, 「学士課程教育の構築に向けて(答申)」, 文部科学省
- 8) 中央教育審議会, 2005, 「我が国の高等教育の将来像(答申)」, 文部科学省
- 9) 日本学術会議, 2010, 『回答 大学教育の分野別質保証の在り方について』, 21-41
- 10) 川嶋太津夫, 2008, 「ラーニング・アウトカムズを重視した大学教育改革の国際的動向と我が国への示唆」, 名古屋高等教育研究第8号, 173-191
- 11) 土持ゲーリー法一, 2013, 「パラダイム転換—教員から学生へ、教育から学習へ—」, 教育学術新聞(平成25年11月13日) 私学高等教育研究所より

### (注)

- 1 文部科学省用語集の以下 URL 参照  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/giji/\\_icsFiles/afieldfile/2012/03/28/1319067\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/afieldfile/2012/03/28/1319067_2.pdf)
- 2 溝上慎一, 2010, 「アクティブ・ラーニングとは」, Kawaijuku Guideline 2010.11, pp.44 参照
- 3 山田礼子, 2013, 「学習成果につながるアクティブ・ラーニング」, 私学高等教育研究所シリーズ No.52, pp.110 参照
- 4 山田礼子, 2013, 「学習成果につながるアクティブ・ラーニング」, 私学高等教育研究所シリーズ No.52, pp.96 参照
- 5 PISA は、Programme for International Student Assessment の略。2000年に最初の調査を行い、以後3年ごとに実施され、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野について調査される。
- 6 小川勤, 2012, 「商業教育論から考察した新たな教授法の研究—アクティブ・ラーニングと商業科教育法—」, 日本商業教育学会商業教育論集第22集, pp.30 参照
- 7 土持ゲーリー法一, 2013, 「パラダイム転換—教員から学生へ、教育から学習へ—」, 教育学術新聞(平成25年11月13日) 私学高等教育研究所より一部引用
- 8 社会構成主義的な学習観とは、人と人と

---

の関わり合いから発達した言語を主とするコミュニケーションを介して、協力して課題や問題の解決を進め、知識の社会的構成を図ろうとする立場の考え方を指す。菅井(2000)は社会構成主義について「知識は個人の頭の中だけであるのではなく、他の人々やメディアなどの種々の人工物に広く状況的に分散されている。そのネットワークや関係性のもとに、相互の協力によって、意味やリアリティのある適切な知識が社会的に構成される」と定義している。